原始林の縁辺に於ける探険者

une ode

富永太郎

青空文庫

Ⅰ

陽(ひ)の眼(め)を知らぬ原始林の
幾日幾夜の旅の間
わたくし　熟練な未知境の探険者は
たゞふかぶかと頭上に生ひ伏した闊葉の
思ひつめた吐息を聴いたのみだ。
たゞ蹠(あなうら)に踏む湿潤な苔類の
ひたむきな情慾を感じたのみだ。

Ⅱ

まことに原始林は
光なき黄金の水蒸気に氾濫し
夏の日の大いなる堆肥の内部さながらに
エネルギーの無言の大饗宴であつた。

あゝ嘗て私の狂愚と慚羞とを照した太陽は
この探険の最初の日
さりげなく　だが　赤々とその身を萎み
私をこの植物の大穹窿の中へと解き放つた。
その日から私に与へられたのは
獣類の眠りのやうな漆黒の忘却であつた……
それを思へば
今もなほ　あゝ　喜びに身が慄ふ！

Ⅲ

毛並さはやかな仔豹のやうに　しづしづと
また軽捷に
私は怪奇な木賊族の夢を貪婪に掻き分けた——
何ものの悪意も知らず　怖れもなくて
強靱な植物らの絶え間なく発汗する
強酒のやうな露を身に浴び

誇りかに　たゞ誇りかに
鼻孔をひらき　かぐろいエーテルを分けて進み行くわが身は
心楽しく闇と海とに裂傷をつくる
春の夜の無心の帆船であつた。

だが　ときをりは
嘗て見た何かの外套（マントオ）のやうな
巨大な闊葉の披針形が
月光のやうに私の心臓に射し入つてゐたこともあつたが……

Ⅳ

恥らひを知らぬ日々（にち）の燥宴のさなかに
ある日（呪はれた日）
私の暴戻な肉体は
大森林の暗黒の赤道を航過した！
盲ひたる　酔ひしれたる一塊の肉　私の存在は

何ごともなかつたものゝやうに
やはり得々と　弾力に満ちて
さまざまの樹幹の膚の畏怖の中を
軽々と摺り抜けて進んでは行つたが、
しかし
喩へば肉身を喰む白浪の咆吼を
砂丘のかなたに予感する旅人のやうに
心はひそやかな傷感に衝き入られ
何のためとも知らぬ身支度に
おのが外殻の硬度を験めす日もあつたのだ！

V

（未完）

青空文庫情報

底本：「富永太郎詩集」現代詩文庫、思潮社
1975（昭和50）年7月10日初版第1刷
1984（昭和59）年10月1日第6刷
底本の親本：「定本富永太郎詩集」中央公論社
1971（昭和46）年1月
入力：村松洋一
校正：川山隆
2014年3月7日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

原始林の縁辺に於ける探険者

une ode

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　富永太郎
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/